



(2004年8月)

【名誉会員・永年会員・貢献者の略歴とお話】

永年会員 江塚昭典



昭和3年8月18日静岡県に生れる。静岡県立見付中学校（旧制）、静岡高等学校（旧制）を経て、昭和27年3月東京大学農学部農学科を卒業。同年麒麟麦酒株式会社製造部技手。昭和28年6月農林省に入省、東海近畿農業試験場（2回）、中国農業試験場（2回）、野菜試験場、農業技術研究所、農業環境技術

研究所を歴任し、チャ、イネ、野菜などの病害の研究に従事するとともに、後進の指導に当たった。また、日本植物病理学会評議員を通算11期つとめた。昭和63年農林水産省を退官、同年～平成3年株式会社島津製作所技術研究本部参事、平成6～12年農業生物資源研究所非常勤職員。

主な業績としては、チャもち病菌の人工培養、チャ網もち病の防除法確立、各種植物もち病菌類の分類同定と新種の発見、イネ縞葉枯病抵抗性の簡易検定法の確立、イネいもち病に対する圃場抵抗性の解明、イネ白葉枯病におけるレースの存在の証明及び新抵抗性遺伝子の発見などがある。特に、イネ病害抵抗性の研究において病理・育種両分野の共同研究に道を開いたことは、各方面から高く評価された。この間、チャ網もち病に関する研究により学位を取得し、またイネの主要病害に対する品種抵抗性の研究により日本植物病理学会賞、日本農学賞、読売農学賞、農林水産技術会議会長賞、科学技術庁長官賞、日本農業研究所賞を授与された。著書には「チャの病害」、著書に準ずるものにはイネ白葉枯病の英文総説があり、他に分担執筆の著書が多数ある。研究発表論文の数は100を超える。そのほか、勤務の余暇に趣味の植物採集で山野をバイクで駆け巡り、シダ類以上の高等植物約2,000種類8,000点の標本作製し、農業環境技術研究所の標本館に寄託した。発見した

新植物にはビンゴムグラ（新称）がある。研究の遂行には、多くの先輩、同僚、後輩各位のご指導ご協力に負うところが大きかった。改めて厚くお礼申しあげる。

私たちの若いころには、「農学栄えて農業滅ぶ」ということにならぬように、とよく言われた。しかし、私たちの努力はこの期待に十分応えたとは言いがたい。今後の植物病理学が、農業の繁栄につながる方向へ進歩することを切に願ってやまない。

永年会員 部田英雄



昭和4年1月16日島根県で出生。昭和25年3月島根県農業講習所卒業。同年4月島根県立農事試験場病虫部研究生。同年10月ト蔵梅乃丞名誉博士の紹介で財団法人大原農業研究所助手。昭和27年4月岡山大学農学部附属大原農業研究所（国に移管、改称）教務員。昭和28年12月岡山大学農業生物研究所（所名改

称）助手。昭和63年4月岡山大学資源生物科学研究所（改組、所名改称）助手。平成3年7月同所附属大麦系統保存施設助手。平成6年1月同所同施設助教授。同年3月定年退官。この間、昭和25年2月農業改良普及員資格試験合格。昭和37年3月病虫害部門農業改良研究員資格試験合格。平成5年イネ科植物うどんこ病菌の有性生殖並びに病原性に関する研究で農学博士の学位を受ける。

私は日浦教授と共同研究し、オオムギ品種のうどんこ病に対する耐病性に関する研究を行い、うどんこ菌を11のraceに分類、オオムギ品種に接種して、18の抵抗性遺伝子を明らかにし、「遺伝子対遺伝子説を提唱」。保存施設のオオムギ品種や系統約6,000種以上、オオムギうどんこ病に対する抵抗性の検定。イネ科植物うどんこ病菌のf. speciales間における生殖的隔離、病原—非病原性の遺

伝、宿主一病原菌との遺伝的相互作用、また寄生性の分化に着目して、種内と種間交雑で有性生殖の初期から子のう殻形成、寄生性の分化機構と交雑による新しい病原性菌系の出現等を研究。病原性を示さない品種に対して、同菌の交雑後代に強い病原性を示す菌株を作出。分化型間の交雑後代からオオムギうどんこ病菌がコムギやカモシグサを侵す菌系の選抜、育成に成功した。

希望：私は初期から病理遺伝学的な研究手法を用いました。若い研究者の皆様、体力と創造性を生かし独創的な研究を希望します。このたび永年会員に推挙いただき御礼申し上げます。さらに本学会の一層の発展をお祈りいたします。

永年会員 祝迫親志



昭和3年5月3日鹿児島県生まれ。昭和23年全国農業会高等農事講習所(現鯉渕学園)入学、昭和26年3月卒業。同4月東京農工大学勤務、昭和27年7月茨城県農業試験場へ転勤。昭和28年神栖村農家の苗床に発生した、一見てんぐ巣症状のサツマイモを、接ぎ木でユウガオ・アサガオ・グンバイヒルガオに、

汁液接種でアサガオ・ユウガオに症状を再現、一種のウイルス病と考えたが、さらに実態調査の結果、トイレに使う殺菌殺虫剤が主因と結論した。昭和30年には那珂湊市を中心に200~300 haの大麦に雲形病が発生し、原因を究明し防除法を確立した。昭和32年白菜ウイルス病の試験を行い、施肥量では窒素多肥区にアブラムシの飛来多く、同時に感受性も高くなった。アブラムシの飛来防止に定植後20日間寒冷紗を被覆すると発病が少なくなり、陸稲・キビなどの間作によっても発病を防止出来た。昭和36年から43年にわたり乾田直播水稻の試験を実施し、直播では紋枯病が多く、麦作地帯では縞葉枯病が多発した。昭和34年から稲白葉枯病の試験を実施し、サヤスグサ・クサヨシ・マコモで本病菌による高い汚染を認め、発生生態の解明と薬剤試験を行い、日植防主催の現地検討会を昭和42年から45年実施した。昭和41年10月から翌年3月まで農技研協本研究室に内地留学し豊富な知識を得た。昭和37年頃から全国のコニャクの産地に根腐病が発生した。被害株から菌を分離したところ *Pythium* 菌が最も多く分離され、接種試験の結果病徴を再現できた。本菌を培養して菌の形態・生理的性質などから *P. aristosporum* Vanterpool と同定した。

さらに発生生態・防除法を確立した。また特産のサツマイモの黒斑病多発問題では土壌伝染を明らかにした。昭和61年農試病虫部長、昭和62年2月農学博士、平成元年定年退職。その後は郷里に帰って南日本植物保護研究所を設立、研究と農家の指導に努めているが難題も多い。この度、永年会員にご推挙を戴き、真に有り難く、長い間ご指導賜った多くの方々に深く感謝申し上げますとともに、日本植物病理学会の益々の発展を祈念致します。

永年会員 小林尚志



昭和3年12月8日熊本県に生まれる。東京農業教育専門学校農芸化学科を経て昭和27年3月東京大学農学部農学科卒業、同年4月東北農業試験場に奉職、栽培第一部病害第二研究室勤務。当時、研究室は鑑谷大節室長が稲熱病抵抗性品種育成に関する植物病理学的研究を進めておられた。以降小生の研究課題

はイネいもち病が中心となった。その後、農林水産技術会議事務局研究調整官補佐、北海道農試病理昆虫部病害第二研究室、東北農試栽培第一部病害第一研究室、熱帯農業研究センター研究部、北陸農試環境部病害第二研究室を経て再び北海道農試に戻り、昭和63年8月農林水産省を退職するまで病理昆虫部病害第二研究室に勤務した。この間、終始優れた上司、同僚に恵まれた環境で試験場生活を過ごせたことを感謝している。在職中、昭和50年4月から同53年3月迄、JICA 農業研究協力計画派遣職員として、インドネシア国中央農業研究所病理昆虫部(ボゴール市)、同58年5月から同60年9月迄ブラジル国セラード農牧研究センター(ブラジリア市)における研究協力計画に参加、両国においては、共に稲作病害を担当した。退官後、呉羽化学工業株式会社社会福祉部として、水稻種子消毒剤の開発に携わり、平成8年職を辞した。現在は在宅で、農林水産技術情報協会の情報検索サービス事業をお手伝いさせていただいている。

学会の思い出としては、駆出し時代に当時講演発表に用いたチャートの運搬係で図表の重さと共に発表内容の重さを印象付けられたことや、1988年のIPCC日本開催の折には研究紹介資料作成のお手伝いがありました。

近年の研究手法の発達は見張るのみです。当時の病害抵抗性研究は圃場における発病調査に始まり、顕微鏡下でも眼と手による観察と計測のデータ解析が主要な手段で

したが、研究機器の発達と共に最新の分子生物学の知見を随意に取入れ、五感で感知し得ない生体内の秘密を探知し生物機能の核心に迫ろうとしているのをみると今昔の思いです。圃場に始まり、その成果をまた圃場に返すことのできる植物病理学の素晴らしい発展を願っております。

永年会員 久原重松



昭和4年3月9日佐賀県に生まれる。昭和25年3月鹿児島農林専門学校卒業、同年6月農林省九州農業試験場病害第一研究室に勤務、昭和48年5月農林省果樹試験場口の津支場病害研究室長、平成元年3月農水省を退職した。その後、同年4月から平成9年3月まで、佐賀県果樹試験場で特別研究員として務め

た。九州農業試験場では主に稲白葉枯病の仕事で、病菌の針接種による成稲を用いた品種の抵抗性検定、苗代期での浸水接種による品種抵抗性検定法を進めた。また、それまでの抵抗性品種での激しい発生から、病原性型の存在とその分布を調べ、さらに、病原細菌のファージに対する溶原性型も明らかにした。それに、苗代、水田、水路水中のファージ量による本病の発生予察の研究に係った。また、発生の時期、程度と収量との関係も調べた。口の津支場では、晩成カンキツの重要病害に対する品種抵抗性を調べ、防除方法を検討した。また、ELISA法による温州萎縮病、カンキツモザイク病の保毒検定を可能にし、当時の急速な品種更新に伴う、これらウイルス病の拡散防止に役立てた。また、カンキツの合成周縁キメラは、両母品種の抵抗性を合わせもつ場合が少なくないので、これを利用してカンキツの重要病害の解決を図ろうと、カンキツの合成周縁キメラの作出法を開発した。このほか、九州農試では発生予察や被害推定、最適防除等の研究の効率化に役立てようと、圃場での稲白葉枯病の発生経過を再現できるシミュレーションモデルの開発を試みた。この様な発生経過モデルの開発は穂もち病、稲紋枯病についても行った。口の津支場ではカンキツかいよう病について発生経過や落葉経過モデルの開発を進めた。それに、高接更新に伴う果樹ウイルス病保毒状態の推移モデルを作り、高接更新がウイルス病の蔓延に重要なことを示した。ほか、カンキツの病害防除を技術的に支援するソフトの開発も試みた。平成4年にはカンキツの合成周縁キメラ作出について科学技術庁長官賞を受賞した。また、口の津支場在任のときは学会の評

議員に席を置いた。今回、永年会員として戴き有り難い幸いです。

永年会員 柴田（旧姓：小針）幸省



昭和3年8月8日福島県生まれ、昭和23年3月宇都宮農林専門学校農学科卒業、同23～25年中学校教諭、昭和25年栃木農試病理昆虫部就職、地区・県予察員を経て同49～52年同農試黒磯分場長、同52～58年農試場長補佐兼病理昆虫部長、農業改良研究員、同58～61年同農試技幹兼鹿沼分場長、同61年3月定年退

職。同年4月～平成3年栃木県農業大学校農業教育専門員（植物防疫担当）、同3～5年3月栃木県植物防疫協会嘱託（農業試験員）。

地区・県予察員在任中は県内で問題となる病（虫）害のすべてを対象課題として、その予察と防除法の解明に当たった。地区予察（観察）員時代は、特に当時栽培期の前進に伴って最大の問題となったヒメトビウンカ媒介のイネ縞葉枯（及び黒すじ萎縮）病の圃場発生生態に取り組んだ。県予察員時代は、いもち病真性抵抗性品種「クサブエ」の罹病性転落の実態の解明と薬剤防除法の確立に当たった。昭和40年代初期は、和製農業の創世期で、年間30数種の農薬をベットとは場で供試し、治療性の高い抵抗物質剤、予防効果（持続性）の高い有機塩素剤、その中間の性質の有機リン剤が選出された。しかし真性抵抗性のみはクサブエは病勢伸展が激しく、手遅れになりがちなことから全天候型薬剤の必要を感じ、苗浸根試験の結果選出した数種薬剤の粒剤化を農薬メーカーに依頼（小石にしみこませたと言う）キタジンP粒剤（いはら農薬）を選出、翌年全国試験で実用性が立証された。後年、オリザメート粒剤が出現した。以後、直行表による新殺菌剤のは場選抜、いもち病空散試験、いちごうどんこ病の防除、大麻病害の実態調査等に取り組んだ（日本植物病害大事典大麻の部担当）。

いもち病の研究に当たっては当時の農事試、農技研の方々の暖かい沢山の御指導をいただいた。この度の思いもよらない身に余る御推挙とともに有り難く感謝している次第です。

有機自然農法の叫ばれている今日、病害と防除の原点をあらためて考えています。学会の発展を祈ってやみませぬ。

永年会員 杉本利哉



昭和3年5月27日三重県にて出生。昭和20年県立中学校卒業。昭和26年北海道大学農学部卒業。同年4月同大学院特研究生として入学。昭和27年農学部助手を拝命。栃内・宇井両先生の指導を受けた。その後間ならず大病を患い、諸先生方のはかり知れない恩恵を受けた事、今でも感謝の念は消えない。昭和36年までは専ら菌核病の同定、感染機構を研究し、中でも本邦で初発生のミブヨモギの病原は、*Sphaerotheca intermedia* で本病は冬期に発生、且つ、土壌伝染する事を解明した。昭和36年当時設立された、てん菜研究所に割愛で異動し、38年同所の病害研究室長として褐斑病種子感染・薬剤耐性菌の発生、苗立枯病菌 *Pythium* spp. など数種が関与する事を明らかにした。勿論これらは同研究室員の仕事に負うところ大なることは言うまでもない。37年頃より所内の圃場・採種てん菜畑に黄化生理障害が発生、周辺の農家原料テンサイまで伝搬し大問題となった。このため村山先生らの指導を受け、共同研究に着手した。当時欧米で猖けつを極めていた BYW、又は BWYV に酷似しており、USDA などの協力を得て、本病はモモアカアブラムシで伝染し、17~20%減収する。そして、47年にてん菜萎黄性ウイルス病に関する研究として、学位を授与された。さらに防除法などが研究され、発病は激減した。昭和48年てん菜研究所は国立北海道農試に移管されたがしばしテンサイの病害研究を継続、平成元年に退官した。テンサイは当時雄性不稔系統×多胚父親の研究が主体であり、高糖・多収系統の選抜育成の時代であった。そのため通常 弱病原菌の炭そ病菌の多発を招き、不稔種子となり、また従来見られなかった菌核病が花器を中心に発生、これらの対策にも心を痛めた。最後になったが、根部を侵す *Rhizoctonia* が葉部に小斑点を形成したが、研究の結果は本菌 AG-2-2 型の胞子が第一次感染源で、これが高温多湿で菌系感染を起こすことを明らかにした。これらの業績は前述の如く室員が中心となって遂行したことによること、又各々が学位を取得したことを申し述べる。最後に老兵の申し述べたいこと、それは前号での土崎博士と全く同一で敢えて省略するが、どうか現役諸賢の方々、健康にご留意第一、そして切磋琢磨精進されることを望むものである。

永年会員 高橋幸吉



昭和3年8月20日岩手県生まれ。昭和28年3月岩手大学農学部農学科卒。同4月農林省東北農業試験場盛岡試験地麦銹病研究室、同36年栽培第二部畑作病害研究室に勤務。同43年9月農水省蚕糸試験場病理部硬化病研究室長、同48年桑病研究室長、同63年10月蚕糸・昆虫農業技術研究所生体情報

部共生機構研究室長を歴任し、平成元年3月定年退官。同年4月日本植物防疫協会研究所調査役に同6年退職、以降同研究所非常勤雇用。昭和48~63年度東京農工大農学部で桑樹保護学講義。同61年5月から日本学術会議植物防疫研究連絡委員2期。平成9~15年度農業生物資源研究所微生物ジーンバンクに非常勤。平成5年農水大臣認定樹木医となり、日本樹木医会農薬アドバイザー、茨城県支部役員も努めている。

顧みると入省当時は畑作振興推進中で、東北農試では最初コムギさび病、次いでダイズウイルス病の抵抗性品種育成目標の病原、特にレースや系統の調査研究でそれぞれ8年間熱中した時代。東大伝研（現医科研）に留学しウイルスの免疫血清技術を学ぶ。コムギさび病では研究室としては抵抗性母本育成に終る。ダイズウイルス病研究では昭和52年に学位、同61年に抵抗性品種育成で日本育種学会賞（東北農試育種グループ）を頂く。ダイズの病原ウイルス・系統は現在も諸研究に寄与している。蚕糸試験場赴任は当時普通作物が減反最中で養蚕業は伸び（戦後最高生産は昭和54年）、省力栽桑技術も誘因となり病害が多発し畑作病害経験者として着任。既知病害の病原や防除法の再検討、枝軟腐病・輪斑病・暗斑病等新病害の解明、縮葉細菌病霜害両面軽減作戦として氷核活性細菌関連研究、赤渋病菌のレースと分布等いずれも多く協力者によるものだが、忘れられない苦労とドラマがあった。

植物病理学会への寄与は昭和52年以来最近まで病名・病名目録編集・学会報総目次編集各委員、発足当時のバイオコントロール研究会幹事等や国際植物病理学会議（京都）では展示部長として努めた。

学会も植物の病原分類診断同定技術の公開講座が若い会員を対象に始まるなど実学実践の重要性を認識し始動した。農業農学新時代に即した植物害防除を目標に病原、環境、効率等広い視野からの植物保護の研鑽を期待する。

永年会員 高桑 亮



昭和3年9月18日札幌市で出生。昭和27年北海道大学農学部農業生物学科植物分科卒業。農林省北海道農試病理昆虫部勤務。新設された病害抵抗性研究室で、馬鈴薯疫病抵抗性について、富山宏平室長のもと、育種、生理、病理の各部門の研究員と共に研究を行った。その中

で病原菌の病原性分化について分担する傍ら、抵抗性生理の共同研究にも参加した。昭和52年「ばれいしょ品種の疫病抵抗性に関する研究」で北海道大学から農学博士の学位を受けた。

いろいろな分野の研究員がひとつの病害について分担することは非常にユニークなことで、お互いに意見を出し合い、話し合ったことが大変懐かしき思い出される。研究の初期にこのような恵まれた環境で過ごすことができたことは未熟な私にとって大変幸いであった。

昭和38年北海道立農試へ転じ、北見支場で病虫科長3年勤務のあと、昭和41年中央農試病理科長、昭和50年病虫部長となる。この間次々と発生する病害の防除に関して所属研究員と共に試験研究を行った。その主なものは、豆類菌核病、菜豆かさ枯病、タマネギ白斑葉枯病、タマネギ乾腐病、リンゴふらん病などであった。それぞれに個性のある病害で、興味は限りなかった。

昭和58年道南農試場長となり、昭和61年定年退官。平成11年まで日本チバガイギー（株）の技術顧問となる。その間平成2年から10年まで拓殖大学北海道短期大学非常勤講師。平成8年「作物の病気の仕組みを追って」（北海道協同組合通信社）を教科書として出版した。

約50年にわたり、一つの専門分野で過ごしたが、今ではなかなか難しいのではないだろうか？この間の植物病理学の進歩はすさまじいものがあり、その波の中で大過なく過ごすことができたのも、多くの先輩や各位のご指導、ご鞭撻の賜物と感謝申し上げる。

永年会員に推挙いただいたことに感謝すると共に、激動の時代に植物病理学会がその勤めを果たし、貢献されることを願う。

永年会員 渡部 茂



昭和3年6月23日福島県で生まれる。昭和24年盛岡農林専門学校卒業。同年岩手県農業試験場助手に採用、技師、病害虫科長、環境部長を経て同57年普及の現場に転出。57～59年北上農業改良普及所長、60～61年花巻農業改良普及所長。62年3月岩手県を退職、4月から北興化学工業（株）で10年間（平成9年

3月まで）、明治製菓（株）生物産業事業部で7年間（平成16年3月まで）技術顧問をつとめる。岩手県在職中の昭和55年インドネシア農業事情調査のため出張。同54年大量種子消毒法の開発に対し岩手県職員業績顕著者表彰（岩手県知事）、同59年農業技術功労賞（農業技術協会）を受ける。同59年イネ馬鹿苗病の発生生態並びにその防除技術の改善に関する研究で東北大学より学位授与。

岩手農試入所3年目の26年発生予察重点解決課題として小麦赤さび病第一次感染源の究明（病害虫発生予察特別報告2号：農林省植物防疫課）、翌27年に長野県、東北各県で発生していた大豆黒とう病防除法確立の課題をいただき（岩手が最多発生面積のため国庫助成をうける）、岩手農試特別報告、北日本病虫研特別報告4号で結果を報告した。経験不足の若輩が重い課題を背負って苦戦したが、中でも研究費助成項目が同一部門毎に開催された中央の成績検討会では、司会の後藤和夫氏にさんざん脂をしぼられたことを思い出す。県農試の使命は申すまでもなく、直接農家が利活用できる技術をタイムリーに創設して普及することである。地味で泥くさい内容が多い。終戦から20年後半までは生産資材、とくに化学肥料が不足したが、供給が潤沢になると病害が多発した。また保温折衷苗代、箱育苗ではばか苗病、*Rhizopus* 属菌、細菌類等による立枯症の多発で対応技術が後手にまわり、現場で大混乱が起こった。施設育苗では大量の種子を取扱うため、種子消毒の効率化が要求された。これは消毒機の開発に成功して解決、短期間のうちに全国に普及した。

農業の現場では環境問題、高齢化など様々な難題を抱えている。その解決のために会員各位の一層の活躍を期待したい。

貢献者 鈴木孝仁



昭和8年10月23日東京都に生まれる。千葉大学・河村貞之助教授のもとで植物病学を学び、昭和31年枋内吉彦北海道農業試験場長（北海道大学農学部長）から辞令を受け、田中一郎病理昆虫部長のもとで紫紋羽病の課題を担当した。これがライフワークとなった。昭和37年北海道大学・宇井格生教授のもとに1年間世話になっ

ているとき第1回土壌伝染病談話会が北大で開催され、以後40年以上にわたる長いつきあいが始まった。その後、熱帯農業研究センター、静岡県農業試験場、農業技術研究所、農業環境技術研究所、農業生物資源研究所に勤務した。平成6年農水省退職後、(株)エスディエスバイオテック、生研機構にお世話になった。アスパラガス紫紋羽病菌の研究では、紫紋羽病菌の根への定着の視点から紫紋羽病は衰弱病であるとの結論を得た。

学会への関与では、つくばに転勤後京都で開催された国際植物病理学会議の会場対応で京都に通い、評議員会では会議室の禁煙を提案し、会計監査は事務的に、貢献者推薦委員会では寺中委員長のもと基準策定に関わった。病名委員会では、新病名等申請制度の創設、病名適用漢字の追加、日本有用植物病名目録第2巻3版と日本植物病名目録の編集を担当した。また、九州大学・脇本 哲教授のもとでバイオコントロール研究会を立ち上げた。学会と関連深い学術会議植物防疫研連、日本土壌微生物学会（旧土病微生物研究会）、日本微生物資源学会、世界微生物保存連盟（WFCC）植物防疫委員会、OECD生物資源理事会に関与した。これらはみな多くの会員に支えられてできたことであり深く感謝の意を表したい。

植物病理学会に限らずどの専門分野でも基礎研究の進展は著しいが、植物病理は現場における植物病害への対応が基本的にあることから、学会はこの両輪をバランスよく進めその社会的国際的任務を果たすことが求められていると強く感じるこのごろである。

【関連学会研究集会情報】

第1回イネ白葉枯病国際会議

イネ白葉枯病は、アジア各国でハイブリッドライスの普及とともに大発生が続いており、本病が主な原因となった「緑の革命」神話崩壊と同様、大きなトピックとなっています。また、研究面では宿主と病原、双方のゲノム解析が

完了した最初の系となりました。

このような背景の下、2004年3月17～19日、つくば国際会議場「エポカルつくば」において第1回イネ白葉枯病国際会議（1st ICBB）を開催しました。会議には米国、フィリピン、中国、フランス、ベルギー、インド、タイなど世界各国から140名のイネ白葉枯病研究者が参加しました。初日はイネ白葉枯病菌相互作用の分子生物学、2日目は耐病性育種戦略、3日目はゲノムを中心としたセッションでしたが、各セッションとも白熱した論議で盛り上がりしました。Jan Leach博士をはじめとする世界的な22名の研究者が招待講演を行い、また、38題のポスター発表が行われました。今回の会議の特徴は第一線で活躍する研究者に加えて、我が国のみならず米国及び中国の若手研究者の参加が目立ったことで、イネ白葉枯病の病害としての、また生物間相互作用の分子生物学的研究における最先端分野としての世界的な重要度が再確認されました。ご存じのように、近年分子生物学の進展によって、植物と病原・共生微生物の相互作用もゲノム情報を駆使して研究が急展開しています。イネはじめ、シロイロナズナ、ミヤコグサなどのモデル植物や細菌を中心とした微生物でゲノム解析が盛んに行われてきました。このように、我が国では発生が激減したイネ白葉枯病ですが、グローバルな視点に立った場合、最重要病害であることに変わりはなく、またナス科植物青枯病と並んで細菌病研究のモデルとしての重要性はますます高まっているわけです。

この会議では、イネ白葉枯病研究の権威であるIRRIのMew博士が近々退官されることもあって、脇本 哲・後藤正夫・加藤 肇先生や梶原敏宏・江塚昭典博士らも参加され、レセプションでは思い出深いスピーチが続きました。最後に南京農業大学のJ. S. Wang博士が3年後の秋に第2回イネ白葉枯病国際会議を中国・南京市で開催することを宣言し、本会議を閉じました。

（農業生物資源研究所 加来久敏）



【会員の動静】

1. 人 事

(1) 大学関係

田場 聡	H15.11	琉球大学 農学部 植物病理学研究室 助手
木原淳一	H15.12	島根大学 生物資源科学部 植物病理学研究室 講師
須藤（中原）健二	H16. 1	北海道大学 大学院農学研究科 植物病原学分野 助手
中島千晴	H16. 2	三重大学 生物資源学部 植物感染学研究室 助教授
八重樫博志	H16. 3	佐賀大学 農学部 植物病制御学分野 教授 退官
日比忠明	H16. 3	東京大学 大学院農学生命科学研究科 植物病理学専攻分野教授 退官
日比忠明	H16. 4	玉川大学 学術研究所 教授
大島一里	H16. 4	佐賀大学 農学部 植物ウイルス病制御学分野 教授
山口健一	H16. 4	南九州大学 園芸学部 環境保全園芸研究室 助教授
瀧川雄一	H16. 4	静岡大学 農学部 植物病理学研究室 教授
柘植尚志	H16. 4	名古屋大学 大学院生命農学研究科 生命技術科学専攻教授
伊藤進一郎	H16. 4	三重大学 生物資源学部 森林生物循環学研究室 教授
清水将文	H16. 4	三重大学 生物資源学部 生態循環学研究室 助手
児玉基一郎	H16. 4	鳥取大学 農学部 植物病理学研究室 助教授
難波成任	H16. 6	東京大学 大学院農学生命科学研究科 植物病理学専攻分野 教授

(2) 農水省試験研究機関関係

今田 準	H16. 3	果樹研究所カンキツ研究部カンキツ研究官
石川雅之	H16. 3	農業生物資源研究所生理機能研究グループ耐病性研究チーム長

藤田佳克	H16. 3	退職〔北海道農業研究センター企調部研究調整官〕→秋田県農業試験場場長
後藤正昭	H16. 3	退職〔門司植物防疫所長〕→東海地区植物検疫協会次長
岩野正敏	H16. 3	退職〔中央農業総合研究センター北陸水田利用部長〕→(社)植防協会研究所
小金澤碩城	H16. 3	退職〔近畿中国四国農業研究センター地域基盤研究部上席研究官〕→カネコ種苗(株)
野村良邦	H16. 3	退職〔中央農業総合研究センター企調部業務3科長〕
出淵斥士	H16. 4	神戸植物防疫所業務部次席植物検疫官
高山陸雄	H16. 4	名古屋植物防疫所統括植物検疫官
若生忠幸	H16. 4	野菜茶業研究所葉根菜研究部主任研究官(ユリ科育種研究室)
小原達二	H16. 4	横浜植物防疫所調査研究部次席調査官
百田洋二	H16. 4	中央農業総合研究センター企調部業務3科長
島根孝典	H16. 4	果樹研究所生産環境部病原機能研究室長
月星隆雄	H16. 4	花き研究所生産利用部病害制御研究室長
園田亮一	H16. 4	野菜茶業研究所茶業研究部病害研究室長
奈良部孝	H16. 4	北海道農業研究センター生産環境部線虫研究室長
加納 健	H16. 4	国際農林水産業研究センター企調部国際研究調整官
松浦貴之	H16. 4	中央農業総合研究センター病害防除部研究員(細菌病害研究室)

(3) 都道府県試験研究機関関係

田村 修	H16. 3	退職(北海道立北見農業試験場 生産研究部長)
木口忠彦	H16. 4	北海道グリーンバイオ研究所 派遣研修 研究職員

三澤知央	H16. 4	北海道立道南農業試験場 研究部 病虫科 研究職員	土井 誠	H16. 4	静岡県農業試験場 天敵プロジェクト 主任研究員
池田幸子	H16. 4	北海道立十勝農業試験場 生産研究部 病虫科 研究職員	加藤弘光	H16. 4	静岡県病害虫防除所
新村昭憲	H16. 4	北海道立中央農業試験場 クリーン農業部 予察科 研究職員	太田光輝	H16. 4	静岡県農業試験場 病害虫部長
田中民夫	H16. 4	北海道立中央農業試験場 クリーン農業部 副部長	赤沼礼一	H16. 5	長野県農業総合試験場 企画調整部 部長
西脇由恵	H16. 4	北海道立花・野菜技術センター 研究部 病虫科 研究職員	山口吉博	H16. 4	新潟県病害虫防除所 業務課 主査
北畠国昭	H16. 4	北海道立北見農業試験場 技術普及部 専門技術員	名畑清信	H16. 3	退職（富山県農業技術センター農業試験場 場長）
岡元克憲	H16. 4	北海道西胆振地区農業改良普及センター 専門普及員	岡本 博	H16. 4	福井県農業試験場 園芸・バイオテク部 部長
竹田富一	H16. 4	山形県農林水産部 農業技術課 課長補佐	古河 衛	H16. 4	福井県農業試験場 生産環境部 病理研究グループ 総括研究員
加藤智弘	H16. 4	山形県総務部 危機管理室 食品安全対策課 農業検査専門員	田口義広	H16. 3	退職（岐阜県農林水産局普及企画室，現アリスライフサイエンス（株）大阪営業所 技術普及課長）
阿部雄幸	H16. 4	山形県最上総合支庁 農業普及課 作物専門員	日野耕作	H16. 4	滋賀県甲賀地域振興局 環境農政部 農業振興課
横山克至	H16. 4	山形県農林水産部 農村計画課畑作振興室 営農計画主査	嘉儀 隆	H16. 4	大阪府立食とみどりの総合技術センター 所長
本田浩央	H16. 4	山形県立園芸試験場 専門研究員	草刈真一	H16. 4	大阪府立食とみどりの総合技術センター 農業技術指導部 技術推進課 課長
佐藤利美	H16. 4	山形県農業大学校 助教授	瓦谷光男	H16. 4	大阪府立食とみどりの総合技術センター 都市農業部 総合防除グループ
佐藤健二	H16. 4	山形県最上総合支庁 専門改良普及員	岡田清嗣	H16. 4	大阪府立食とみどりの総合技術センター 都市農業部 総合防除グループ
牛尾進吾	H16. 4	千葉県農業総合研究センター 生産環境部 病理研究室 主席研究員	田中 寛	H16. 4	大阪府立食とみどりの総合技術センター 農業大学校（非常勤講師）
崎山 一	H16. 4	千葉県農林水産部 農業改良課 技術振興室 主査	入江和己	H16. 4	兵庫県立農林水産技術総合センター 淡路農業技術センター 農業部 部長
海老原克介	H16. 4	千葉県農林振興センター 振興普及部 改良普及課 改良普及員	島津 康	H16. 4	和歌山県農林水産総合技術センター 果樹試験場うめ研究所 主任研究員
三輪千華	H16. 4	千葉県農業総合研究センター 暖地園芸研究所 環境研究室 研究員	楠 幹生	H16. 4	香川県農政水産部 農業経営課 専門技術員室
星 秀男	H16. 4	東京都病害虫防除所 主任			
芹沢拙夫	H16. 3	退職（静岡県農業試験場 場長，現在は静岡県経済連）			

井上 興 H16. 4 山口県庁農林部 農村振興課
主査
福原宏行 H16. 4 山口県豊田農林事務所 主任

2. 学位取得者（課程博士・論文博士）

斎藤憲一郎 H15. 3 東京農工大学 博士（農学）
イネいもち病菌の感染初期過程
に発現する遺伝子の分子生
物学的解析
A. Muslim H15. 3 岐阜大学 博士（農学）Bio-
logical control of *Fusarium*
diseases of tomato and spinach
with hypovirulent binucleate
Rhizoctonia
仲川晃生 H15. 9 東京農工大学 博士（農学）
ダイズ白絹病菌の発生生態の
解明と防除法の開発
松本裕之 H15. 9 静岡大学（岐阜大学連合大学
院）博士（農学）ソ菜類軟
腐病菌・*Erwinia carotovora*
subsp. *carotovora* におけるペ
クチナーゼ生産・分泌制御機
構の分子生物学的解析
李 春江 H15. 9 岩手大学 博士（農学）リン
ゴ小球形ウイルスのゲノム構
造とウイルスベクターへの改
変に関する研究
長谷川優 H15. 9 鳥取大学 博士（農学）イネ
内穎褐変病菌の発生生態に関
する研究
大貫正俊 H15. 9 九州大学 博士（農学）わが
国に発生するベゴモウイルス
(*Begomovirus*; *Geminiviridae*)
の分子分類学的研究
伊藤隆男 H16. 1 東京大学 博士（農学）国内
のカンキツが保毒するウイロ
イドの発生生態と診断に関す
る研究
落合弘和 H16. 1 東京大学 博士（農学）植物
病原性 *Xanthomonas* 属細菌
の遺伝的多様性に関する研究

竹原利明 H16. 1 東京大学 博士（農学）硝酸
塩利用能欠損変異菌株を用い
たフザリウム病の発生生態の
解明に関する研究
西村麻里江 H16. 1 東京大学 博士（農学）イネ
いもち病菌の感染に関する形
態形成
佐藤昌直 H16. 3 北海道大学 博士（農学）ク
ローバー葉脈黄化ウイルス感
染に対するマメ科植物の応答
に関する研究—抵抗性および
病徴決定について—
川上 顕 H16. 3 北海道大学 博士（農学）コ
ムギの雪腐黒色小粒菌核病抵
抗性の解析
藤根 統 H16. 3 北海道大学 博士（農学）ア
ズキ萎凋病抵抗性品種選抜に
有用なアズキ萎凋病菌の植物
毒素の検出
青葉登志子 H16. 3 東北大学 博士（農学）カラ
マツ林における外生菌根菌カ
ワリハツの分子生態学
米澤美穂 H16. 3 東北大学 博士（農学）根部エ
ンドファイト *Heteroconium*
chaetospora のハクサイ根への
侵入・定着過程の組織学的解
析
鈴木文彦 H16. 3 東北大学 博士（農学）イネ
もみ枯細菌病菌の病原性毒素
に関する研究
小林有紀 H16. 3 東北大学 博士（農学）ソラ
マメウルトウイルスと(新)
リンドウモザイクウイルスの
同定と診断に関する研究
大木保善 H16. 3 岩手大学 博士（農学）樹木
の枝枯れに関与する *Pezicula*
属菌（アナモルフ *Crypto-*
sporiopsis 属菌）の分類・病
原性および培地上における光
形態形成に関する研究
李 壮 H16. 3 岩手大学 博士（農学）さび
菌の生活環および分類学に関
する研究

- | | | | | | |
|---------------------|--------|---|--------------------|--------|---|
| 早坂 剛 | H16. 3 | 岩手大学 博士（農学）水稻病害の環境保全型防除技術に関する研究 | 平田久笑 | H16. 3 | 東京大学 博士（生命科学）Studies of the gene expression strategies of the <i>Apple Stem Grooving Virus</i> genome |
| 川部眞登 | H16. 3 | 東京農工大学 博士（農学）トマト萎凋病菌 <i>Fusarium oxysporum</i> f. sp. <i>lycopersici</i> の病原性関連因子と系統に関する分子生物学的解析 | 新宮良宣 | H16. 3 | 明治大学 博士（農学）イネもみ枯細菌病菌の病原性遺伝子の解析に関する研究 |
| 高橋真実 | H16. 3 | 東京農工大学 博士（農学）イネ縞葉枯ウイルスのゲノム構造と遺伝子の発現に関する研究 | 鈴木 歩 | H16. 3 | 静岡大学（岐阜大学連合大学院）博士（農学）エンドウの細菌病に関する研究 |
| 宮本 勝 | H16. 3 | 東京農工大学 博士（農学）イネのいもち病抵抗性に関する遺伝学的研究とその育種への応用 | 戸田 武 | H16. 3 | 岐阜大学 博士（農学）Identification, differentiation and detection of <i>Rhizoctonia</i> species using molecular techniques |
| 小長谷賢一 | H16. 3 | 東京農工大学 博士（農学）タバコモザイクウイルスに対する防御応答のシグナル伝達に関与するタバコにおける宿主因子の探索 | 山本文子 | H16. 3 | 名古屋大学 博士（農学）植物の病害ストレス応答における一酸化窒素の関与とその生成系に関する研究 |
| 沼田慎一 | H16. 3 | 茨城大学（東京農工大学連合大学院）博士（農学）遺伝子組換え微生物を利用したバイオコントロール技術の開発 | 清水将文 | H16. 3 | 三重大学 博士（学術）内生放線菌を用いた病害耐性組織培養苗の作出に関する研究 |
| 小野祥子 | H16. 3 | 横浜国立大学 博士（環境学）酸性 <i>PR-1</i> 遺伝子の制御因子群に関する研究 | 水本祐之 | H16. 3 | 京都大学 博士（農学）Gene expression mechanisms of Dianthovirus |
| 松尾直子 | H16. 3 | 横浜国立大学 博士（環境学）IRES を利用した高等植物多重遺伝子発現系の構築 | 竹田篤史 | H16. 3 | 京都大学 博士（農学）Analysis of plant virus movement proteins and RNA silencing suppressors |
| 魏 薇 | H16. 3 | 東京大学 博士（農学）ファイトプラズマの免疫組織化学的手法による動態解析 | Evelyn Aigho Aremu | H16. 3 | 鳥取大学 博士（農学）Infection-inhibiting metabolites against <i>Alternaria</i> pathogens produced by bacterial and fungal endophytes |
| Kraus Francois Jean | H16. 3 | 東京大学 博士（農学）Molecular mechanism of blast disease resistance in chitinase over-expressing rice plants | 児玉基一郎 | H16. 3 | 鳥取大学 博士（農学）植物病原糸状菌の感染成立過程における宿主特異的毒素の役割に関する研究 |
| 柿澤茂行 | H16. 3 | 東京大学 博士（生命科学）ファイトプラズマのタンパク質膜輸送系およびその基質に関する研究 | | | |

3. 大学関係の海外長期出張者

(1) 大学関係

- | | | |
|------|---------|----------------------------------|
| 竹下 稔 | H16. 3 | 九州大学 |
| | ～H17. 3 | Scottish Crop Research Institute |

【学会ニュース編集委員コーナー】

学会ニュース編集委員会

平成16年度学会ニュース編集委員会は学会2日目の3月29日12時～13時30分に開かれた。まず、本年度の委員として松山宣明(委員長)、阿久津克己、加来久敏、堀江博道、富岡啓介の各氏が紹介された。前年度の事務報告に引き続き、次の事柄について検討が行なわれた。すなわち、従来、新名誉会員、永年会員から頂くメッセージ原稿は手書きの場合があり、幹事が判読に苦労しながら一度ワープロ等で打ち直し印刷へまわしていた。今後は、事務量の軽減、間違い防止のためワープロの使用とフロッピーによる原稿の提出をお願いする。また、民間の人事異動に関する記事は、「植物防疫」等記載の記事の中から、学会員のみを幹事がピックアップして記載する。以上のほか、今年度の行事予定の紹介とニュースの編集計画が検討された。

(松山宣明)

情報提供および投稿のお願い

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物の御紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せ頂きたいお願いいたします。

投稿宛先：〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

松山宣明、阿久津克己、加来久敏、堀江博道、富岡啓介、各委員宛

編集後記：

本号には、本年新たに永年会員に推挙された江塚昭典、部田英雄、伊東茂久、祝迫親志、小林尚志、久原重松、柴田（旧姓小針）幸省、杉本利哉、高橋幸吉、高桑 亮、渡部 茂の11氏（うち10氏について掲載）、貢献者表彰の鈴木孝仁氏のご略歴とメッセージをご紹介いたしました。長い間のご活躍に敬意を表し心からの感謝を申し上げます。皆様方におかれましては、くれぐれもご健康に留意され、今後とも引き続き植物病理学、防疫学の発展にご尽力下さいますようお願い申し上げます。

本学会ニュースは会員の皆様の人事異動や受賞、学位取得、海外出張、書籍発行などのニュースを漏れなくお知らせする方針でおります。情報のご提供を宜しくお願いいたします。

(松山宣明)
